第９回多摩川流域歴史セミナー

『古代多摩川追想-近世における歌枕の成立』

午後の部：講演　小野 一之 氏

－開催報告－

『多摩川50景』 是政の多摩川

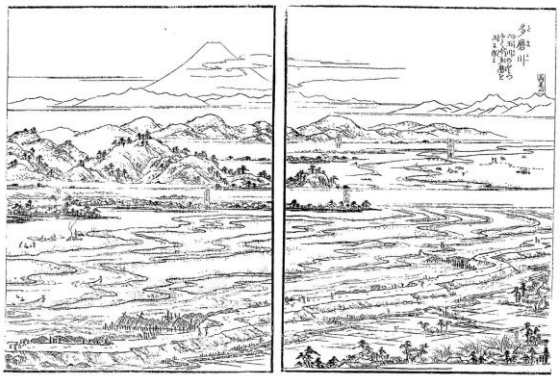
令和2年1月18日（土）
多摩川流域懇談会

第９回多摩川流域歴史セミナー
講演『古代 多摩川 追想 -近世における歌枕成立-』

講演：小野 一之 氏
（府中郷土の森博物館館長）

■はじめに-『江戸名所図会』の多摩川

『江戸名所図会』は、江戸時代後期にベストセラーになった名所案内のガイドブックで、全７巻 20 冊が出版され、「多磨川」についての紹介は巻３に載っております。この本の特色としては、当時の絵ばかりではなく、歴史的な場面を想像して描いているような絵もたくさん含まれており、古代の多摩川を追想したと思える絵も描かれています。



江戸名所図会の「多磨川」の挿画

■多摩川か、玉川か

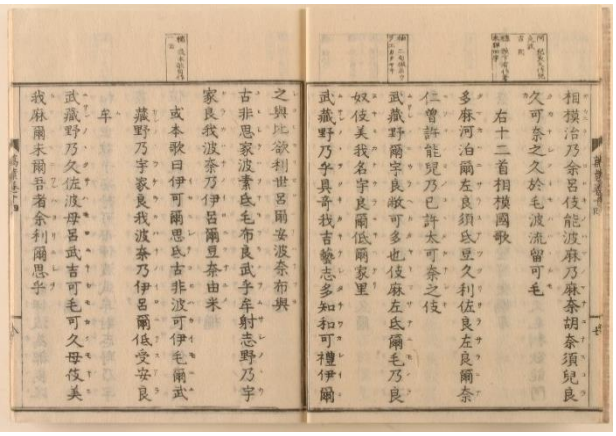
・どちらの表記が古く、本来の書き方か

古代から中世、鎌倉時代までの古い記録や古文書で多摩川あるいは多摩郡がどう表記されていたか一覧表にまとめました。川の名前として登場するのは意外と少ないのですが、大体の傾向がわかると思います。

古代・中世の多摩川・多摩郡表記一覧

年代	河川名	郡名	出典
8 世紀頃	多麻河伯		万葉集
8～10 世紀		玉・多磨・多麻	武蔵国府・国分寺出土瓦・塼
平安時代初期		多麻郡・多磨郡	日本霊異記
宝亀 3 年(772)		多磨郡	宝亀 3 年太政官符
天長 10 年(833)		多磨入間両郡	続日本後紀
承和 2 年(835)	（石瀬河）		類聚三代格
承和 13 年(846)		多磨郡	続日本後紀
延長 5 年(927)		多磨郡・多麻	延喜式
10 世紀前半		多磨郡(太婆)	和名類聚抄
寛弘 2 年(1005)頃	玉河		拾遺和歌集
12 世紀中頃	多磨河		五代集歌枕
久寿元年(1154)		（西郡）	白山神社経塚出土経
仁安 2 年(1167)		多波郡	武蔵名勝図会所引 常光寺経筒
治承 4 年(1181)		（多西郡）	吾妻鏡
文治 4 年(1188)	玉川		千載和歌集
鎌倉時代初期		多磨(タマ)	伊呂波字類抄
貞応元年(1222)		多摩郡	萩藩閥閲録
安貞元年(1227)		多摩郡	安貞元年関東御御教書写
仁治 2 年(1241)	多磨河	（多磨野）	吾妻鏡
建長 2 年(1250)		（多西）	真慈悲寺 阿弥陀像背銘
文永 11 年(1274)		多摩郡	文永 11 年関東御御教書写
正和元年(1312)		（多西郡）	正和元年高麗忠綱譲状
正和 4 年(1315)		（多磨野）	正和 4 年鎮西下知状
元応元年(1319)		（多西郡）	小野神社 随身倚像銘
嘉暦 3 年(1328)		（多西郡）	真福寺 理趣経秘決奥書

多摩川の初見は『万葉集』で、原文には漢字だけで表記されており、「多麻河伯（泊）」と書かれております。これは万葉仮名と呼ばれ、一音一字で音を示し、漢字自体にはそれほど意味はなく、今でいう片仮名で書くことにあたります。



万葉集東歌の「多麻河泊」（右から４行目）

一覧表から言えることは、古代の郡名には「多磨」と書く表記が多く、武蔵国府・武蔵国分寺跡から見つかる瓦などには「多磨」や「多麻」、１文字で「玉」と書くものがあり、３種類が知られています。

平安時代の和歌集では「玉河」が使われることが多くなっています。最初は音で「タマガワ」と呼ばれており、漢字を充てようとして「玉川」になったらしく、「玉川」の方が早い可能性が想定されます。そこで次の設問です。

■地名と川の名前、どちらが先か

・多摩川が流れているから多摩か、多摩を流れるから多摩川か

この問題を解く鍵の一つは、「多摩」という地名が全国にほとんどないのに対し、「多摩川（玉川）」という川の名前はたくさんあるということです。玉川という名前は自然に発生しやすいと考えられ、一番古くは奈良時代に編さんされた『常陸国風土記』に「玉川」が出てきます。この川は、今の久慈川の支流で、常陸大宮市か那珂市のあたりを流れている川です。それとは別に、全国各地に「玉川」があり、平安時代ごろに歌枕として知られるようになりました。そして、「井出の玉川」「三島の玉川」「調布の玉

川」「野路の玉川」「野田の玉川」「高野の玉川」の 6 つがまとめられ「六玉川」と呼ばれるようになりました。

歌枕「六玉川」一覧

名称	旧国名	比定地	代表歌	キー・ワード
井手の玉川	山城	京都府綴喜郡井手町	駒とめてなを水かはん山吹の花の露そふ井手の玉河〔新古今集 藤原俊成〕	春・山吹・貴人
三島の玉川	摂津	大阪府高槻市	見渡せば波のしがらみかけてけり卯の花咲ける玉川の里〔後拾遺集 相模〕	夏・卯の花・里
調布の玉川	武蔵	東京都・神奈川県	多摩川にさらす手づくりさらさらになにそこの娘のここだかなしき〔万葉集 東歌〕	秋・柳・布晒し・衣打つ竪杵
野路の玉川	近江	滋賀県草津市	あすも来む野路の玉川萩こえて いろなる波に月宿りけり〔千載集 源俊頼〕	秋・萩・川面の月
野田の玉川	陸奥	宮城県多賀城市	夕されば潮風越してみちのくの 野田の玉河千鳥鳴くなり〔新古今集 能因法師〕	冬・松・千鳥
高野の玉川	紀伊	和歌山県伊都郡高野町	忘れても汲みやしつらん旅人の 高野のおくの玉川の水〔風雅集 弘法大師〕	高野山・弘法大師

古代・中世の武蔵国歌枕一覧

書名	分類	武蔵国の歌枕
能因歌枕〔11 世紀前半〕	武蔵国	あくしの池　たかせ川　つき人の浦　いはせのわたり　しろがねのたち　むさし野　ほりかねの井　浅くさ
五代集歌枕〔12 世紀中頃〕	山	よこ山
	野	むさしの　たちの
	河 付 河原	たながわ　おほやがはら
	池	おざきの池
	嶋	かさしま
	崎	さきたまのさき
	津	さきたまのつ
八雲御抄〔13 世紀前半〕	岳	しのひの岳
	原	むさしのゝ原
	野	むさし野　たち野
	関	かすみの関
	里	よしのゝ里
	井	ほりかねの井
	池	おさきの池　はこの池
	沼	あかすの沼
	河	たま河　（武 陸奥歟）
	津	さきたまのつ　（出 武一本）
	嶋	かさ嶋
	崎	さきたまの崎

地名が先か川の名前が先かという問題の鍵として、1 つは玉川の名前が全国的にあり、自然発生しやすい名前であること。もう 1 つは「タマ」が最初から広い地域を指す地名であったということです。武蔵国には 21 の郡があり、多磨郡には多摩郷はありません。7 の郡には郡名と同じ名前で郷の名前があります。行政区画としては国・郡・郷という並びで、そのうち郡の名前と郷の名前が一致するところが多く、橘樹郡橘樹郷や荏原郡荏原郷、高麗郡高麗郷などがあります。多磨郡というのは、郷の地名を飛び越えてつくられた広いエリアの地名と考えられ、自然発生しやすい川の名前が先で、その川の名前にちなんで中流以上の多摩川水系が広がるエリアを多磨郡というふうに命名したと思われます。郡名というのは律令国家が地方行政制度のもとでつけた地名で、当初は「郡」ではなく「評」とされ、いずれコオリと読みました。多磨郡も、年代的には 7 世紀の半ばくらいになると思いますが「タマ評」が設置され、大宝律令で「タマ評」から「タマ郡」になったことが想定されます。要するに「タマ川」が先で、その川の名前にちなんで「タマ評」「タマ郡」になったと思われます。

■多摩川はなぜタマ川か

・「多摩川」、「玉川」の名前の由来とは

多摩川は、古くは「玉川」と書かれていたようで、地名より河川名が先行するのではないかということを話しました。結論から先に申し上げれば、「玉のような美しい石に恵まれた川」という意味で「玉川」と呼ばれるようになったと思っております。多摩川のタマが「玉」であることは、次の 2 つの理由が考えられ、1 つ目は、『万葉集』の「タマ川」の歌でタマを「多麻」と書き、同じ『万葉集』には、明らかに「玉」と思われる「タマ」を「多麻」と書いた例が幾つも見られるということです。

2 つ目は、先ほども話しましたが、『常陸国風土記』に「玉川」があるということです。そこに「玉川」の名前の由来が書かれており、同じようなことが武蔵国の多摩川にも言えるのではないかということです。『常陸国風土記』には、地名由来と言われるものは川の場合 2 つしかなく、1 つが「玉川」で、もう 1 つは「助川」です。助川の由来はサケがいたからとなっていますが、「玉川」の方はとても自然な感じです。「西□里に、静織（しとり）の里あり。」「北に小水（おがわ）あり。丹（あか）き石交錯（まじ）れり。色、琥珀（こはく）に似て、火鑽（ひうち）に尤（いと）も好（よ）し。以（も）ちて玉川と号（なづ）く。」 つまり、赤い琥珀に似た石がまじっていた、だから「玉川」とつけたというふうになっています。武蔵の多摩川も同じような感じであったのではないでしょうか。

多摩川の表記の流れとして、1 つは「玉石の川」と

して「タマ川」という名前で呼ばれるようになった。それを漢字で表記すれば「玉川」となり、川の名前にちなんで、「玉評」という行政区画が設置され、701年に大宝律令が施行されると「玉郡」となりました。713 年に行政地名改正が行われると「多磨郡」となり、「玉川」も「多磨郡」の地名の漢字に倣って「多磨川」と書かれるようになったと思われます。

「玉郡」が「多磨郡」となったことについては、平城遷都後間もない和銅 6 年（713）、朝廷から行政地名改正の命令が出され、地名を縁起の好い 2 文字に統一されたことによります。1 文字の「玉郡」も 2 文字の「多磨郡」という表記になったと考えられます。

国名についても、713 年に 3 文字の「无耶志国（むさしのくに）」から 2 文字の「武蔵」に改められたと考えられています。奈良時代の後半になってから『続日本紀』という本の中に出てくる記事に、「武蔵」というのは、武をおさめて文を尊ぶ称だとして、文芸を重んじる平和の世界だというふうにうたっています。この考えは、江戸時代にも引っ張られ、『江戸名所図会』には冒頭にヤマトタケル伝説を扱った絵があり、「武蔵」の由来がテーマになっております。ヤマトタケルは、大和から派遣されて東国制圧し、もう武器は必要ないとして、秩父の武甲山に穴を掘って武器武具を埋めたという伝説を描いています。この絵では、左側のところで穴を掘って、東征に使った武器武具を埋納している光景になっています。「无耶志」を 2 文字で「武蔵」としたというのは、平和の象徴であったということです。

同じように「玉郡」も、よりめでたい漢字ということで「多磨郡」となったと思われます。「多磨川」というのは後に「多摩川」に変わってきますが、石を書く「磨」という字も手を書く「摩」という字も、両方とも「みがく」という字です。石で磨くことから手で磨くということに変わったと解釈すれば、より心を込めて慈しんだ言い方に変わり、川の名前も「玉」から「多磨」、そして「多摩」と変わってきた変遷がたどれると思います。

『江戸名所図会』のヤマトタケル伝説

■多摩川と丹波川のこと

・多摩川の語源をめぐるもうひとつの問題

今でも、奥多摩湖より上流を「丹波川（たばがわ）」と呼んでいますが、平安時代では「多磨郡」を「タバ郡」と呼んでいた例があります。それは平安時代の『和名類聚抄（わみょうるいじゅしょう）』という本で、全国の国・郡・郷を紹介した中で武蔵国の「多磨郡」の読みを「太婆（たば）」としています。一方、多摩川についても、室町時代頃に漢字で「多波川」「多破川」と書く例が幾つか確認できており、恐らく「タハ川」、「タバ川」というふうに読んでいたと思われます。かつて、多摩川は本流で「丹波川」と呼ばれていたことがあり、その名残が上流の「丹波川」ではないかと考える余地があるのです。

『調布玉川惣画図』の玉川水源

・なぜ上流だけ「タバ川」になっているのか

ところが、多摩川が古くは「タマ川」「玉川」であったことは間違いないと思います。平安時代以降、一部で「タマ郡」が「タバ郡」になまり、「タマ川」

も「タバ川」となった時期がありました。本流の「タマ川」が「タバ川」に転訛していた時代に上流域の開発が行われ、そこを流れる源流の方も「タバ川」というふうに呼ばれるようになり、その後、本流の方が「タマ川」に戻り、上流の一部だけに「タバ川」の呼称が残った、こう考えておきたいと思います。

■玉川、復活！

これまで「玉川」から「多磨川」というふうに変化したと話しましたが、江戸時代に再び「玉川」と書く例が増えます。これを文芸世界における「玉川」の再発見という流れの中で考えてみたいと思います。

江戸時代の文芸の世界の中で「タマ川」を「玉川」と書き、玉と関連づけ「玉のように」というような形容詞を用いて表現されることが多くなりました。

最初に紹介するのは大田南畝（江戸の狂歌師）で玉川を遊覧したときの文章です。「玉川に遊ぶの記」で「水声錚々鏘々として、玉を鳴らすが如し。」と表現されています。「玉川に遊ぶ」という漢詩の中では、「玉水清流を激しうす。」というような表現が出ており、いずれも「タマ川」を「玉川」と書いて、玉との関連で「タマ川」を表現しています。

一方、『江戸名所図会』については、「多磨川」の項目で「六玉川」に倣って「多磨川」を「玉川」と書くようになったと説明しています。再び「玉川」になった理由として、歌枕の六玉川の影響があったと考えられます。

もう１つ、「玉川」の例を挙げると、地元の府中の大國魂神社です。大國魂神社は近世までは六所宮と呼ばれていました。江戸時代末期ごろの神主の和歌集が残されており、「玉川」の歌があるか探したところ、猿渡盛章という江戸の文化文政期から神主を務めた方の『榛の下草』という歌集にありました。「瀬をとめて　あそふほたるハ　川の名に　なかるゝ玉と誰か見さらむ」という歌で、ホタルは川の名前のように流れる玉のようだというようなことを詠っています。もう１首は、「川の名の　玉とやこれも　ひろふへき　峯の真砂の　松の下露」ということで、川の名前の玉として拾うべきだ、松の下の真砂よ、という歌だと思います。また、盛章の息子である猿渡容盛が幕末から明治にかけて神主をしており、歌集を『榛の下枝』といいます。「わすれすよ　君にたくひて　玉川の　小石ひろいに　いてしむかしを」の歌があり、これは亡くなった友人の追悼ので、玉のような小石を一緒に拾いに行った昔のことを忘れないよと歌っています。いずれも「タマ川」を「玉川」と書いて、玉のような石、玉のような流れの川というふうに表現しているように思います。

以上、事例としては、わずかしか挙げられませんが、江戸時代後期に盛んな地域文芸の世界があり、多摩川が「六玉川」の一つとして取り上げられ、「玉のような美しい石に恵まれた川」、あるいは「美しい玉になぞらえる川」、そういった多摩川であることが再発見された状況がうかがえると思います。一度は定着した「多磨川」というような表記は、再び「玉川」の表記もあわせて使われるようになった理由として、以上のような背景があったと考えられます。

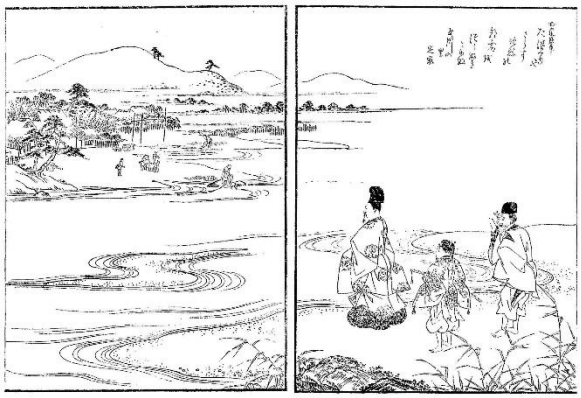
■おわりに−多摩川、古代追想−

『万葉集』の東歌・防人歌には数多くの東国各地の地名が詠み込まれております。そこで多摩地域と見られる地名は３つあり、「多摩川」「武蔵野」「多摩の横山」です。多摩地域で出てくる地名がこの３つであることは偶然ではないと思います。「多摩川」「武蔵野」「多摩の横山」というのは、多摩川と武蔵野台地、多摩丘陵の３つであることに相違ありません。東歌の地名は、単なる東国の田舎の地名ではなく、国府の近くや主要な道路沿いであるなど、早くから国文学者の間でも指摘されてきました。武蔵の場合も３つの地名は国府から見た景観と考えられます。

３つの景観を詠んだ歌から古代の景観を想像すると、国府の街の前面、見下ろすような方向に流れる雄大な多摩川があり、そこでは国府建設の資材となるような木材を運搬する水運が盛んで、いろいろと国府へ運ばれる物資の水運もあったと思われます。ちょうど東山道武蔵路という南北ルートが横断する

渡河点にも当たり、交通の要衝としてのにぎわいもあったのではないかと思います。漁労も盛んで、国府の近傍では朝廷に納めるための調布、麻布をつくる作業にいそしむ人の姿も数多くあったと思われます。

『江戸名所図会』の歴史的な場面を描く挿画の中に古代を回想したような多摩川の絵があります。万葉歌が詠まれた古代の様子を、中世の藤原定家が対岸から見ており、それを近世の『江戸名所図会』が描いて、その絵を現代の私たちが見ている。そうした時代を超えた多摩川追想のテーマというのが、この小さな絵の中には盛り込まれているというふうに考えました。



江戸名所図会の古代多摩川追想

最後にまとめです。多摩川の名前の由来は、「玉のような美しい石に恵まれた川」、すなわち「玉川」であった可能性が高いと思います。また、今日の多摩地域につながる多摩の地名も、川の名前にちなんで奈良時代に評（郡）の名前としてつけられたということ。さらに、武蔵国府近傍の麻布の生産に関わる労働歌だった恋の歌が『万葉集』に採録されたことから、多摩川は後世に至るまで歌枕として広く知られることになりました。そして、江戸時代には元の意味であった「玉川」の表記で、文芸の世界で繰り返し取り上げられ、多摩地域や江戸・東京の人々にとって、身近にありながらも「古代の原風景」を追想できる場として親しまれるようになったということです。

歌川国芳の錦絵「武蔵国調布の玉川」

質疑応答・意見交換

講演者： 小野 一之氏
コメンテーター ：小田 静夫氏

■補足説明

【神谷】配られた資料について補足説明していただいた方がよろしいかと思います。資料の補足をお願いいたします。

【小野】1つ目の「古代・中世の多摩川・多摩郡表記一覧」では、「多西郡」というのがあります。中世の時期に、多摩郡は広いので2つに分解されており、「多東郡」と「多西郡」で西と東に分かれていました。多摩川や鎌倉街道が境になっているかと言われております。

次の表は「六玉川」の一覧で、所在地名、それぞれの市町村名を記し、武蔵の「調布玉川」には「東京都・神奈川県」とだけ書きました。「東京都調布市」と書く方法もあろうかと思いますが、歌枕としての「調布玉川」がどこかという話は、3つ目の表と関係しております。古代・中世の武蔵国歌枕一覧の表ですが、3種類の歌枕一覧表が現在知られており、能因法師の備忘録としてまとめた『能因歌枕』が今のところ一番古いものになります。その本では武蔵の歌枕を原本でもひとまとまりにしていますが、その他の歌枕集は、それぞれの地形の分類の中から、武蔵とされているものを拾い上げる作業が必要になります。

この中で多摩川というのがいつ出てくるかというと、『能因歌枕』には多摩川が出てきません。『五代集歌枕』では、写本の段階で写し間違いだと思われる「たながわ」が「多摩川」だと思われます。『八雲御抄』の中では「たま河」とはっきり出ています。ただ、そこでは注釈として「武　陸奥歟」と書いてあり、この段階では「六玉川」の1つとしてまとめられる陸奥の「野田の玉川」もすでに念頭に上がっていたことがわかります。

問題なのは、『能因歌枕』に多摩川がないことです。多摩川はないのですが、「いはせのわたり」というのがあります。一方、『類聚三代格』には承和2年(835)、交通量が多いので渡し舟の数をふやすことを認可した法令があり、そこには「武蔵国石瀬河」があります。これは従来より多摩川のことだと考えられていますが、この「石瀬河」の渡し場が『能因歌枕』の「いはせのわたり」ではないでしょうか。そうすると、歌枕というのは交通の要衝や国府の近くということを前提と考えれば、平安時代のころ、主要な街道が多摩川を渡る地点というのは、今の丸子橋のあたりですから、『能因歌枕』で言う「いはせのわたり」の歌枕は丸子のあたりではないかと推測しています。その後、この歌枕は「たま河」と言い換えられたと考えられます。

■質疑応答

【神谷】それでは、質疑応答に入っていきたいと思います。質問が今3～4つ出ていますので、一通りざっと答えていただいて、議論をしていけたらと思います。

【参加者】「多西郡」「多東郡」はどの地域のことでしょうか。

【小野】近世の文書で、確かにこのあたりは多東郡となっており、博物館で展示してある徳川家の朱印状でも「多東郡府中」というような書き方をしています。これは多摩川を境に多摩郡を東と西に分けているということです。

【参加者】「タマ評」と書かれた木簡、戸籍帳等が出ているのでしょうか。

【小野】「タマ評」というのは、残念ながらまだありません。武蔵国では後に那珂郡というのがあり、「仲評」というのが飛鳥京の木簡で出てきております。将来的に木簡は出てきますので、評制の時代と言いますが、孝徳朝から天武・持統朝にかけての木簡は、飛鳥京・藤原宮で発掘される可能性が大いにあると思います。そのときに「タマ評」が見つかればよいと思います。

【参加者】『日本書紀』の武蔵国造の乱のあとの屯倉(みやけ)設立で、「多末」を多磨とするのが多いですが、関連性はありますか。

【小野】『日本書紀』の原文では「多氷(たひ)」と書いてあります。「多末」という字の誤りだとされています。

このときのほかの屯倉「橘花」などは奈良時代の郡の名前と一致しますので、この「多氷」についても「多磨」だというふうに解釈するのが通説になっていますが、よくわからないところがあります。ほかに「多末」あるいは「多氷」というような文献の出現を待たなくては、これ以上検討ができないのですが、「多磨」の地名の語源を「多末」あるいは「多氷」に求めるということも方法としてはあり得るかと思います。

【参加者】『万葉集』では「玉」のことを「多麻」と表記していたとのことですが、玉ではない他の「たま」の表記とは区別されていたのでしょうか。

【小野】膨大な「万葉集」の中で全て原文と意味するところを対照したわけではないので、お答えできないです。引き続き調べていきたいと思いますが、『万葉集』の中で東歌・防人歌以外の「タマ」については、「多麻」ではなくて「玉」という字をそのまま書いて「タマ」としている例が圧倒的に多いと認識しております。

【参加者】「タマ」「ムサシ」の音は古代朝鮮語由来という説があり、「多麻」「武蔵」もその音への当て字ではないか。

【小野】「多麻」「武蔵」が古代朝鮮語由来かどうかという考えもありますが、歴史学の世界で受け入れられるということは、余り聞いたことがありません。

【参加者】当て字にあたっては、その根拠として植物学者によると、麻は繊維をとる総称で、武蔵野台地には多くの麻が生えていたからではないか。

【小野】「多くの麻」の意から「多麻」という言い方になったというような説が一部にあると聞いたことがありますが、『万葉集』の万葉仮名というのは、漢字一字一字については意味がないものです。「多麻」と書いてあるからといって多くの麻があったということは話が逆になってしまい、そういった説に従うことはできません。

【参加者】この地域に入植した渡来人が、このカラムシ等でとり布を作った。従って、磨は繊維とりのための石を使った手法、摩は人の手ですく作業の意である。この産業が調布や砧の地名で残っているという説は、地域の物語として、風景として興味深いと考えるが、いかがでしょうか。

【小野】「調布」は地名として古くはないということと、「砧」もどのくらい遡るか、きちんと調べたことがないですが、「砧」という地名は確かに調布生産との関係を考えると興味深いです。それ以上のことは調べようがないというのが感想です。

【神谷】今のようなお話も含めて少し議論をしていくということで進めたいと思います。小田先生に今日のご感想も含めてコメントをいただけないでしょうか。

【小田】今日の小野先生のお話とスライドが非常にきれいで、見たり聞いたりすることが非常にうれしく、楽しく時間を過ごさせていただきました。歌枕にあらわれているいろいろな絵を見ていると、本当にきれいに描かれているものが多いと思います。

「タマ」という文字が出てきたというのは、私の研究範囲ではないですが、奈良時代ぐらいから日本に文字がたくさん使われる時代が来ました。古墳時代や弥生時代に文字があればよいのですが、少ない史料しかなく、「タマ」について本当に「タマ」という字をどういうふうな漢字で書いたか、読みをしたかというのは考古学的にはわかりません。美しい石が多摩川で取れたのではないかということがまとめて書いてありますので、考古学的に玉という石を本当に当時の人たちは歴史的に使っていたのか、また、喜んで珍重したのかということを考えてみました。江戸の町をつくるときも、荒川あたりは石のない地域だったため、江戸城は伊東の石切り場から船で運んだわけです。では、多摩川はどうだったかというと、多摩川はきれいな石があり、河原にたくさん落ちていました。旧石器時代の人たちが多摩川の石をどんなふうに利用したか考えると、本当にきれいな石でちゃんと石器をつくっていました。縄文時代はいろいろと珍しい道具が発明され、初期農耕が縄文

時代に行われたという研究があり、掘り起こす鍬を多摩川の石でつくっていました。特に、調布の深大寺のお寺の裏に青渭神社があり、そこの畑にはたくさん縄文時代の石器が落ちていました。その石は、多摩川の石で、調布のあたりの多摩川は大きな鍬に使えるような打製石器をつくれる石があったということです。古墳時代には、多摩川の石を使ったかというのは、史料的にはなかなかないです。旧石器時代や縄文時代の遺跡を掘ると、赤い石でつくった石器が少し出てきます。その石はどこから来たのかということを調べましたが、山梨で瑪瑙がたくさん取れています。塩山のところに水晶山という名前のついた山があり、そこは水晶も瑪瑙出ています。

では、その石が多摩川に入ってきたかというと山脈が違い、塩山の方の川と多摩川とはずれているため、恐らく縄文人や旧石器人は甲府の方まで行って、拾って持ってきたと思います。『万葉集』の歌でも白玉が出てきますが、白い玉が多摩川にあり、石英が河原にたくさん落ちているが遺跡からは出ていません。そういうことを考えると、今日のいろいろな歌枕の史料を見て、考古学的にもいろいろなことが推察できるのではないかなと思います。

【参加者】多摩を流れるから多摩川なのだと考えていたので、多摩川が先だとは意外でした。また、玉川が「六玉川」以外にあるとの話でしたので、調べてみたい。ほかの玉川も含めて、玉川と呼ばれた共通点は何かあるのでしょうか。

【小野】自然発生的と言うからには、やはり玉石のこと、河原石のこと、そういった景観から川の名前になっていると思います。

【神谷】多摩川中流域の歴史を考えたとき、府中は外せない。国府が置かれ、国分寺がある、総社がある、今回は改めて認識するに至りました。歌枕に関する部分ももっと伺いたかったです。

【江口】多摩川中流域の中でも国府が府中に置かれ、その後、国分寺が造営されるということで、武蔵国の中心だったわけです。そこには必ず多摩川があり、国府が府中に置かれた最大の理由は、交通の要衝です。府中が東山道武蔵路という官道、道路と多摩川、水陸交通の要衝にあったからこそ、武蔵国の一大センターとなる国府が府中に置かれたというふうに私は考えています。

【眞下】六玉川のお話もいただきましたが、玉川は「多磨」というふうに文字が転化したというお話がありましたが、例えばほかの 5 カ所の川などでは、そういう文字が転化するような事例があったのでしょうか。

【小野】六玉川の「武蔵の玉川」以外の表記なのですが、ほかはそういった変遷が確認できません。平安時代以来の勅撰和歌集等で六玉川に関すると思われる玉川の歌が載っていますが、その中では全て「玉」あるいは平仮名で表記されているので、ほかのところはなぜ変わらなかったのかというと、「武蔵の玉川」は郡の名前として持ち上げられたため、和銅のときの好字 2 文字といった必要が生じて、「多磨」に分解され、結果的に川の名前にも移ってきたという事情があります。

ほかの玉川については、もともと大きな川ではなく、玉川だけが格段に大きいだけであって、ほかは小さい川で、大きい川の支流にすぎないというところで、とても郡の名前になるようなものではなかった。言いかえれば、2 文字にする必要はなかった川の名前であったということです。従って「玉川」のままずっと来てしまったのではないかと考えています。

【眞下】武蔵野というのは台地状の部分を指して、多摩川というのは多摩川を中心とした周辺地域を指しているという認識で間違いないのでしょうか。それとも、多摩という部分と武蔵野という部分はどういう形でかぶっていくのか、近世あたりの認識などを教えていただけるとありがたいなと思いました。

【小野】多摩と武蔵野に関わる地名の近世における扱い方ということでしょうか。『万葉集』に詠まれた「武蔵野」という地名は、最初から武蔵野台地全体に広がる広いエリアを詠ったものではなく、歌の内

容からしても広大な原野ではなく、国府の人々が生活する間近なところで、例えば占いをするとか恋のかけ合いをするとか、そういった情景です。後世になるような広大な台地、広漠な原野というイメージは『万葉集』ではまだ全くあらわされていないということで、少なくとも『万葉集』の地名というのは、東歌特有に国府の近く、国府から見た景観のその範囲内で表現されているというふうに考えます。

それが「武蔵野」の場合には、次第にその指すところのエリアが広くなってきました。1つには、国府を中心にして東山道武蔵路のような交通の盛んな道がつくられ、国司の官人たちが行ったり来たりしている中で、国府の背後であるにもかかわらず広大な原野ということが目についてしまった。そういった中で、「武蔵野」といったものが広大な原野だという歌枕のイメージが都に運ばれることになり、国府の周りの野原だったところが次第に広漠な原野のイメージになり、実際に地名として広がり、近世に入ってから武蔵野の新田開発が行われ、その新田の名称自体が「武蔵野」ということになりました。武蔵野も広がっていくということで、最終的には東京の北西部から埼玉の南西部に至るような、いわゆる武蔵野台地のエリアまで広がっていたことになります。歌枕の「武蔵野」というのは『万葉集』の時代からどんどん広がっていって、最終的に近世の新田開発等が契機となって、より広いエリアになっていったという流れが想定できると思います。

【神谷】野川と多摩川に挟まれた範囲のところが武蔵野だったという理解でよろしいということですか。

【小野】最初の「武蔵野」というのをどこに置くかですが、「武蔵野」という地名の初見は『万葉集』の東歌です。この地名が特異なのは、ほかに例がない「国名＋野」です。国の名前を冠にして「○野」というのは、その時代ありません。東歌というのは、よく武蔵野の農民が歌った民謡だというような言い方がありますが、地元に住んでいる在地の人が、自分の周りの野原を詠んで「国名＋野」とは言わないです。「国名＋野」という言い方自体ほかに例がないため、そこで考えるのが国府の周縁ということで、東歌自体が国府の周りで詠まれたということが多いということがあります。その中で「武蔵野」というのも、最初に詠まれた景観というのは国府の周り、国府の後背地ということです。それが地名としてあったか定かではなく、それが野川までかはイメージでは考えられないと思います。それが後になって、どんどん広がっていったというのは、先ほどお話ししたとおりのことだと思います。

【小田】「武蔵野」の範囲が当時どういう範囲を呼んだかというのは難しいでしょう。武蔵国府とか国分寺をつくるときに、奈良の政庁はどういう理由でそこに立地させたか。武蔵国府や国分寺をつくるために都の人たちが発想した思想というのは中国の思想です。風水という思想があり、前面に高い塔や山、そういうものを一つ置いて、その手前には池などの水を置き、反対側にまた崖をつくり、その真ん中の平らなところに都をつくるという、中国の都をつくる風習を日本の奈良の王朝はやっていました。そういう設計で武蔵国もやろうとしたときに、一番いい場所かと思います。当時、古墳が早く入ってきたのは千葉の市原あたりや多摩川の田園調布あたり、または川崎のあたりです。あの辺は一番古い古墳があり、奈良から移ってきました。そこで、多摩川の上流に向かって古墳文化が進んで来ます。狛江には、上円下方墳という大陸と同じようなものがあり、三鷹や多摩市にもあり、八王子でも見つかっています。古墳時代に帰化人の王様たちが住んだところが多摩川流域で、その後の時代の人たちは、野原のあった武蔵野台地の広大な土地の中で、どこが一番中国の風水思想に合った場所かと考え、野川の国分寺の崖線、そして今の国分寺と府中市の平らな野原となります。これは「武蔵野」と呼ばれてないと思います。多摩川があって、多摩の横山がある場所は、今の府中市のこの場所にしかありません。神谷さんが言っている「武蔵野」という場所は、一つ高い野川の国

分寺崖線より上の高い台地に「武蔵野」というイメージを奈良時代の人たちは持ったのではないかと思います。

【神谷】多摩がなまって丹波になったということなのか、もともと多摩と丹波は別だったのか。

【小野】全く別で、偶然ということもあります。本流の方は、一時期なまって丹波になったことがあったにせよ、基本的に「多摩」であり「玉」であったとすれば、全くの偶然の両方の「タバ」がつながってしまったということです。考えられる１つとして、「タバ」は「丹波」と書きます。それ以外に、例えば本流でなまったときは「多波川」だとか「多破川」とかで、「丹波」の字にしたことは多分ないと思います。最初から最後まで「丹波（たんば）」と書いて「丹波（たば）」と読ませるとすれば、もともと上流のエリアと本流の方は別で、別々にでき上がった川の名前と地名が偶然一致してしまった可能性はあるかと思います。

【神谷】「タマ」の語源説はたくさんあって、まだわからないということになると思いますが、そういう中でも、今日のお話で、随分多摩川について整理できたと思います。

最後にまとめを小田先生にお願いいたします。今後の歴史セミナー、これまでの流れも含め、ご指摘いただければと思います。

【小田】多摩川流域を歴史的に研究するセミナーが、今回で９回目になります。非常に長く続いて、一つ一つのセミナーの発表が充実して、史料も整ってきました。今日、夢ビジョンが袋に入っていたと思いますけど、パッと開いてアッと思いました。皆さん、お家に帰ってお孫さんに見せたら、喜んでいただけると思います。多摩川の現状が、いろいろと細かくぎっしりと入っているすばらしいものです。私は、これを開いて感激しました。

それと、一つ案が生まれました。これは現代ですから今の多摩川です。これを歴史セミナーで時代別に一枚ずつつくったらどうでしょうか。お子さんにもわかるようなイラストをきれいに入れて、ビジュアルにつくったら１つの川の流域をこれだけやったのは世界にないです。今日、千葉では、チバニアンという地質の世界の名前がついたと喜んでいました。タマニアンをつくりませんか。

多摩川がいつごろできたか、最初の多摩川の景色を皆さん地図で見たことないと思います。多摩川の流域の線は引けないでしょう。東京湾は海だったのでナウマン象やオオツノ鹿とかが歩いていたわけです。それがだんだん干上がってきて、火山の爆発があって富士山の噴火物がいっぱい積もって、武蔵野台地が形成されてくるわけです。そのときは、まだ武蔵野台地の基盤は石ころの河原で、青梅から、隆起した扇状地と言われている多摩川は河原です。それがもう少し時代がたつと乾いて、一つ一つ川が削られて、砂利が削られて、そして武蔵野台地がきれいな川筋になっていきます。そこでやっと、人間が大陸から来て多摩川に住んで、多摩川を舞台にした現在までの歴史があります。

そういうような歴史を一つ案としてまとめてみたいという思いが生まれました。

【神谷】いいご提案をいただきました。この歴史セミナーもあと２回ぐらいでまとめるような段階まで来ました。小田先生のご提案も含めて、これから検討していきたいと思います。意見交換は、これでおしまいにしたいと思います。皆さま、ありがとうございました。

小野 一之 氏　プロフィール

・府中市郷土の森博物館　館長

埼玉県生まれ。中央大学大学院前期博士課程修了。専門は日本古代史。著書に『武蔵府中くらやみ祭』。共著に『検証 日本史の舞台』（東京堂出版）『変貌する聖徳太子』（平凡社）など。1987 年開館時より学芸員、2012 年より現職。

【講演者挨拶】

この歴史セミナーも多摩川流域を中心に開催していますが、府中に来ていただくのは 4 回目となりました。ご参加いただき、ありがとうございます。本日は、古代の多摩川を中世・近世あるいは現代の視点から追想してみたいなというふうに思って設定したものでございます。

開会挨拶：神谷 博 氏（多摩川流域懇談会運営委員長）

今日は、午前中から参加いただいた方は、足元の悪い中でお集まりいただきまして、ありがとうございました。午後からも冬らしい寒い日でしたが、皆さんにお越しいただき盛会になりましたこと、お礼申し上げます。午後の部も「古代多摩川追想－近世における歌枕の成立－」ということでお話していただけるとのことで、とても興味深く、私も楽しみにしております。

まとめ：小田　静夫 氏（東京大学総合研究博物館研究事業協力者）

歌枕できれいなスライドを見せていただき、多摩川の語源や由来などが全部わかってしまった気持ちになりました。多摩川流域を歴史的に研究するセミナーが今回で 9 回目となり、一つ一つのセミナーの発表が充実し、史料も整ってきました。夢ビジョンが袋に入っていたと思いますが、多摩川の現状が、細かくぎっしりと入っているすばらしい資料をいただけたことに感激しました。今後は、歴史セミナーの史料を元に時代別で一枚ずつつまとめて行けたらと思っております。

感想：眞下 祥幸 氏（江戸東京博物館学芸員）

私は古文書などをやっている関係で、実際の多摩川や多摩川上水などに興味がありますが、今日お話を聞いて、江戸時代あるいはそれより前の人々がどういうふうな意識を持っていて、調査物が出てきたことや実際に多摩川の文字のあり方などを非常によく説明していただきました。私もいつから丹波川から多摩川になったのかと思っていたこともあり、玉の字から始まり、それが転化していった様子など非常に興味深く拝聴させていただきました。荒川の方は石がないということで、多摩川は特徴的な川だったのかなということを再認識させていただきました。

感想：江口 桂 氏（府中市文化スポーツ部ふるさと文化財課長）

午前中は寒い中、お集まりいただきまして、ありがとうございました。
今日は、もっと現地をゆっくりご案内させていただきたかったのですが、悪天候でご案内できず残念でした。多摩川中流域にある府中の地に興味を持っていただけたこと、大変うれしいことでございます。

閉会挨拶：中村　修也 氏（多摩川流域懇談会副委員長）

本日は、第 9 回多摩川流域歴史セミナーに大勢の方がご参加いただきまして、誠にありがとうございました。午前の部では「多摩川を歩く」ということで、府中市の江口課長様の方から神社や史跡についての詳しく、わかりやすい説明をいただき、私にとっても多摩川の歴史・文化に触れられたのではないかと思っております。また、午後の部では、小野先生から基調講演を行っていただき、多摩川の名前の由来や多摩の地名、川の名前のどちらが先かなど大変興味深いお話を聞くことができました。私自身、余り歴史とか文化に詳しくはありませんが、本当に参考になり、勉強になりました。この歴史セミナーも、あと 2 回と残りわずかとなりますが、次回もぜひセミナーにご参加いただければ幸いです。

『多摩川流域歴史セミナー』

「多摩川流域歴史セミナー」は多摩川と人間の関わりの歴史を掘り起こし、「多摩川らしさ」としての地域文化を再発見することを目的として、先史・古代、中世、近世と年代を追いながら、多摩川流域の博物館、歴史館等を会場として、地域に即したテーマで随時公開セミナーを開催していきます。

第 9 回多摩川流域歴史セミナー『古代 多摩川 追想−近世における歌枕の成立−』開催報告

作成　多摩川流域懇談会

■多摩川流域懇談会は、多摩川にまつわる歴史文化を総合的に研究し、その成果をわかりやすく多摩川で活動する人が利用し、多摩川をより深く知ることができるよう、取組みの幅を広げ、活動を行っています。

■多摩川流域歴史セミナーに関する情報は京浜河川事務所ホームページをご参照ください。

URL：http://www.ktr.mlit.go.jp/keihin/keihin_index116.html